

自ら問い、自ら導く学生たち

吉田幸平

(よしだ・こうへい)さん

医学部
保健衛生学科4年
弓道部

●看護師として働く叔母の影響もあり、高校生のときに看護師になろうと決めた。看護学専攻は、女子53人に対して男子は2人しかいないが、性別への意識はないという。「患者さんは男女半々なのだから、もっと男性看護師がいてもいい。自分は患者さんの小さな変化に気づくことができるような看護師になりたい」と語る。



「子どもたちの
心のケアも行える
小児看護師になりたい」

背筋を伸ばし左右の胸郭を開いた状態で静かに弓を射る。誰かと競い合うのではなく、自分自身と戦うのが弓道だ。的中しない原因もすべて自分の中にある。

医学部保健衛生学科看護学専攻4年の吉田幸平さんは、弓道部に所属している。東日本看護学生大会では、1、2年は個人優勝、3年では準優勝、4年で3位と好成績を残した。成人の日に明治神宮で行われる全国弓道遠の大会でも新成人の部で優勝した。姉の影響で高校1年から弓道を始めたが、最初の1年間は部内でも一番下手で、まるで的に当たらなかった。ところが2年のときに主将に選ばれ、「下手なりに頑張らなければ」と奮起。神奈川県代表として国体に出場し、遠的種目で1位になるまで成長した。

「いくら練習で好調でも、本番で緊張して手先が震えてしまえば的を外してしまいます。弓道では、筋力や体力よりも精神力が大切です。たくさん練習を積むことで自然に体が動くようになり、練習と同じ気持ちで試合に臨めるようになります」

弓道の精神は「真・善・美」にあるとされ、真の己と向き合い、平常心を保ち、形の美しさを追求する。的中率だけではなく、弓を射る姿勢、弓道場に入場してから退場するまでの一連の流れ（体配）までが競技に含まれる。「弓道で学んだ礼儀作法や常に相手を敬う姿勢は、看護師として患者さんに対応するときに生きてくると思えます。この気持ちを失わないためにも、弓道はずっと続けていきたいです」

看護学専攻では、3年次後期は病院での臨床実習になる。吉田さんは、川崎病で小児科病棟に入院中の2歳の男の子を担当した。はじめのうちは話しかけただけで泣かれてしまうこともあったが、日に日に親しくなり、一緒に遊べるようになったという。

「まだそれほど言葉も通じないのでも苦労したところもありましたが、相手が子どもだからといって子ども扱いせず、一人の人間として、丁寧な言葉遣いで話しかけることを心掛けました」

卒業研究のテーマは「入院児の病棟における遊びと小児看護の在り方を検討した文献研究」。入院中の子どもたちの遊びは、その後の発達にも影響があるといわれている。また、遊ぶことで日々の治療や処置のストレスから解放されることにもなる。

「処置などに追われる病棟の看護師が遊びますとすると難しいのが現実です。でも、できる限り子どもたちの心に寄り添うような看護師になりたいと思っています」

卒業後は病院で臨床経験を積んだ後、小児専門看護師の資格を取得するために大学院に進学するという。吉田さんの夢への挑戦がはじまる。